

で インド EXPO 水

―技術応用した展示目立つ ブースで際立つタタ・グループ

ウォーターインディアではトルコ、ベトナム、2018EXPOが先月23日から3日間、インドの首都ニューデリーのコロンベンションセンターで開催された。今回で5回目となる水EXPO「スマート・シティ」をテーマに水と運輸、ソーラーパワー、建築の分野同時開催の展示会となり、約2万人が来場した。出展者数は、合計約380社であり、95%がインド企業、海外でまとまったの出展は台湾、韓国、中国であり、単独

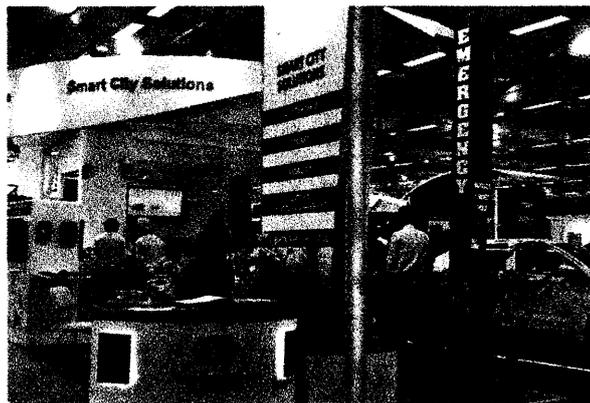
界で最も劣悪な水を飲まざるを得ない国である。したがって水質は122カ国中120番目と極端に悪い。水使用の有効性は世界180カ国の中で133番目である。タタが本格進出

タタが本格進出

その巨大企業が本格的に水事業に乗り出してきた。タタ・グループのプロジェクト責任者によると、現在の水に関する主要な事業は、ITによる水資源管理、ガンジス川の浄化・保全、下水処理

インドは数学が得意な国民性で、EXPOパンフレットに数値が羅列されている。インドの面積は世界の2%しかないが世界人口の15%はインド人。しかしインドは世界の水資源の4%しか保有していない。インドの水は8割が汚染されており、世

見たままの水を飲む。水EXPOの会場では、東南アジアの展示会に見られるような、水の浄化システム・機器展示、関連する膜処理技術、海水脱塩などは、まったく見られず、インドの誇るIT技術を水管理に応用



タタグループの出展ブース

ティション430カ所(給水量15万立方メートル)を運営している。小型の飲料水装置に全てIT技術を付加し、安全・安心な飲料水供給(QRコード使用、飲料水ATM)、メンテナンスフリーを打ち出し、業績を急拡大させている。EXPO会場では、とにかくIT技術の活用が主体であり、個別機器の展示はほとんど見られない。

日本の水ビジネスチャンスは

残念ながら、インドではスズキ自動車以外、日本企業の技術は、ほとんど知られていない。公共の上水道も、政府にその資金がなく(人口は13億人を超えているが、納税者は国民の1%以下)、水インフラの構築は海外の援助資金に頼っている。また民間向けには、工場排水処理や再生水ビジネスがあるが、主体となる水処理膜の価格も、中国製と思われる価格は日本の3分の1程度、組み立てコストも日本の5分の1である。したがって日本製品を売り込むのは無理であり、逆にインドの特徴である「格安で高度に集積された水に関するIT技術」を持つ会社と組み、日本勢は世界市場、特に東南アジアの水ビジネス拡大に取り組むのが最善と思われる。(グローバルウォータージャパン代表 吉村和就)

水・土壌環境